様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２３ 日現在

機関番号：３４３０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３７０９６９

研究課題名（和文）中国壮族における文字文化の継承についての人類学的研究

研究課題名（英文）An anthropological study on the succession of character culture among the Zhuang people in China

研究代表者
手塚　恵子（TEZUKA, KEIKO）

京都学園大学・人文学部・教授

研究者番号：６０２６３１８３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は中華人民共和国の壮族の新しい書き言葉である現代壮文の普及が全く進まない要因を、国家の言語政策のみに帰するのではなく、フィールドワークと聞き書きによって壮族の人々が文字に対してどのような観念を抱いていたかを明らかにすることを通じて、考察しようとしたものである。考察の概略は以下の通りである。
壮族の農村社会では、行政文書や系譜（家譜）を記述する漢字と、壮族のうたを記述する方塊字（漢字系民族文字）を併用してきたが、その使用範囲は明確に区別されてきた。場面を問わずに使用することができ、かつその表記体系としてアルファベット表記文字を採用した現代壮文を、壮族の人々は受け入れることができなかった。

研究成果の概要（英文）：This study examines whether the fact that the new Zhuang writing system (Zhuangwen) is unpopular is because of its inclusion in the national language policy in China or because of its inclusion in other factors.This research clarified the thoughts of the Zhuang people regarding the use of characters through field work. The findings of the study are as follows.
In the rural social community, Chinese characters describing administrative documents and genealogies (house notations) and Zhuang characters (ideograms derived from Chinese characters) describing the song's songs have been used together, but the scope of their use has been clearly delineated. The Zhuang people could not accept the new Zhuang writing system (Zhuangwen), which can be used in both situations, and adopted alphabets in their writing system.

研究分野：文化人類学

キーワード：中国　少数民族　壮族　民族文字　漢字　言語政策　現代壮文　方塊字(古壮字)

１．研究開始当初の背景

中華人民共和国の少数民族の言語は、共和国成立以前から書き言葉を持っていたと見なされ、共和国成立後もその文字の使用が継続して許された 5 言語からなるグループと、共和国成立以前には書き言葉を持っていなかったと見なされ、文字を持たない民族に文字を与えるという言語政策の対象となった諸言語からなるグループに大別できる。

壮族は中華人民共和国成立後に国家の政策により、現在の広西壮族自治区に該当する地域に居住するタイ系の言語を話す諸グループが一括して壮族という民族として認定されたものである。

アルファベット表記の「現代壮文」は、上述の言語政策に則して 1957 年に制定され、少数民族の新しい民族文字の創設と普及のモデルケースとして、農村地域で普及運動が行われた他、学校教育にも導入されたが、人々の徹底したサボタージュにより普及運動は頓挫し、ついに学校教育からも除外されるに至った。

少数民族の文字教育が普及しない要因については、中国政府の言語政策が、制限された民族自治権の代償としての文化自治を保障するために民族文字の普及を推進するというものから、共通語としての漢語（普通語）の普及を推進するというものへと、変化したためであるとする見方（庄司博史「中国少数民族語政策の新局面」『国立民族学博物館研究報告』27、2003 年）が一般的である。

本研究の代表者（以下報告者と記載する）は壮語壮文学の中心的な教育研究機関である広西民族学院で現代壮文を学び、壮族の口承文芸について研究してきた（手塚恵子『広西壮族歌垣調査記録』大修館書店 2002 年など）。『中国の少数民族教育と言語政策』（岡本雅享、社会評論 1999 年）は、現代壮文の普及運動の当初より漢字識字層である自治区行政職による抵抗が強かったと述べているが、報告者のフィールドでの経験によれば、農村における漢字の非識字者層も確固たる信念を持って、この普及運動を無視してきたように感ぜられる。

共和国成立時に文字を持たないとされた壮語であるが、広西壮族自治区の各地には、千年以上伝承されてきた壮語の書き言葉「方塊字(古壮字)」が存在する。方塊字は日本の仮名、ベトナムのチュノムと同様に、近代以降も使用されてきた漢字文化圏の漢字系文字である。

漢字系文字には、①漢字をそのまま使用する段階、②新しい文字をつくる段階、③別系統の文字を使用する段階があるが、仮名は漢字を変形させてその民族語に適応させたもの（②－1）であり、チュノムは漢字の構造原理を利用し新しい文字を作ったもの（②－2）であり(河野六郎『文字論』三省堂 1994 年)、方塊字はチュノムと同様の造字法である（西田龍雄『言語学を学ぶ人のために』世界思想社 1991 年）という。

日本思想史の観点によれば、近代以前では、仮名は基本的には恋愛の言葉としてあり、漢字は政治的言説の言葉としてあるように、両者は分立して存在していたが、西洋近代と出会うことによって、何用にでも使用できる書き言葉が必要となり、漢字漢文と格闘しながら近代的な漢字仮名まじりの言文一致の文体を作り上げ、仮名と漢字の分立状態を終わらせたという（子安宣邦他「音声と文字／日本のグラマトロジー『批評空間』11 号 1993 年）。

近代以前の状況はベトナムでも同様で、チュノムは基本的に詩や物語の言葉としてあり、その他の用途では漢字が用いられた。その後ベトナムがフランスの植民地下に入ると、フランスによってアルファベット表記のクオック・グーが与えられ、その推進が図られた。河野によればこれは③の漢字とは全く別系統の文字を使う段階であり、この漢字系文字からの離脱が同時に他律的に中国文化からの離反をもたらしたという。後にベトナム人自身によってクオック・グーを積極的に受容して、ベトナム語の言文一致を推進しようとする運動がおこり、ベトナム民主共和国ではクオック・グーのみを使用するようになった。

日本語やベトナム語の書き言葉の変遷から、（１）漢字文化圏では、漢字と漢字系民族文字が分立して使用されている時期があること、（２）それらは西洋近代と出会うことによって、２種類の文字の分立状態を終息させ、言文一致の書き言葉である国語を創出したこと。その過程では漢字漢文化との葛藤やそれからの離脱を経るといったことが理解できよう。

報告者はこれまで、中国の少数民族と漢族との間に見られる文化的多様性と画一性を探究してきた。宗教儀礼に焦点を当てたものとして道教と壮族の祭祀儀礼の共通点と差異を浮かび上がらせた「儺と醮を繋ぐもの」（『日本文化の人類学／異文化の民俗学』法蔵館 2008 年）などがあり、口承文芸に焦点を当てたものとして漢族と壮族に共に伝わる物語歌を分析した「古壮字による梁山伯祝英台Ｉ－壮族に伝承された怪異物語－」（『人間文化研究』第 30 号 2013 年）がある。これらの研究は、米国の中国研究の大きな分野である民衆文化の研究、中国社会を結合させる紐帯として、「口承文芸による誘導」と「儀礼の規格統一」に注目する研究（popular Culture in Late Imperial China (University of California Press 1985)Death Ritual in Late Late Imperial China and Moderan China(University of California Press 1988)）に連なるものである。

報告者は「現代壮文」の普及に生じた問題についても、漢族と少数民族を結合させる紐帯の問題として捉えられるのではないかと考え、壮語と構造的に同じ位置にあると考え

られる漢字文化圏の漢字系文字の変遷を参考にしながら、本研究を立案した。

２．研究の目的

従来の現代壮文に関する議論では、言語政策上の観点から現代壮文の普及が進まない要因を求めているが、本研究はフィールドワークによって、農村における方塊字と漢字の使用の在り方を明らかにし、壮族の人々が文字に対してどのような観念を抱いていたかを解明することを通じて、現代壮文の普及が進まない要因を探るものである。

３．研究の方法

広西壮族自治区(南寧市、河池市宜州地区、武鳴県、平果県)におけるフィールドワークと関係者からの聞き書きによって、

（１）農村において方塊字と漢字が用途を異にしながら並立して使用されてきた実態

（２）農村部における現代壮文の普及活動の実態

（３）学校教育における現代壮文の教育実践の実態

（４）方塊字に関する研究の現況

（５）壮語を母語とする者が現代中国で漢語あるいは壮語で言語表現をすることの意義と問題点

を明らかにしたうえで、壮族の人々が文字に対してどのような観念を抱いていたかを解明する。またそのことを通じて、現代壮文の普及が進まない要因を探るものである。

４．研究成果

（１）農村において方塊字と漢字が用途を異にしながら並立して使用されてきた実態について

・壮族の話し言葉について

（現在のいわゆる）壮族が日常会話で主に使用する言語は壮語である。壮語には南部および北部の二大方言があるが、方言差が大きいため、両者の間の会話は困難である。

また南寧市では広東語が、柳州市では西南官話（北京語の方言）が話されるなど、都市部では、漢語が優勢である。

中華人民共和国成立以前

農村での日常生活では壮語が使用されていたが、農村であっても中間市場以上の規模を持つ定期市では、漢語（広東語、西南官話など地域によって異なる）が使用されていた。農村においても、少数であるが漢語の話者は存在した。

中華人民共和国成立以降

ラジオ、テレビ、初等教育の普及により、農村でも普通語（標準北京語）を理解する人が増えた。1960 年代以降に生まれた人は普通語による会話が可能である。壮語は現在も家庭内、地域内で日常的に使用される言語である。

・壮族の書き言葉について

中華人民共和国成立以前

農村で使用されていた書き言葉は、漢語を書き表すための漢字と壮語を書き表すための方塊字である。漢字で書かれた文として、行政文書、道教および仏教の経典、各宗族の由来と歴代の男性成員の名およびその生涯を記した家譜がある。家譜は各宗族の持つべきものとされたため、その編集に熱意を注いだ宗族もあるが、家譜を所持していない宗族もある。村の男性成員の全てが家譜を読めたわけではない。漢字を読み書きできる者は少数であった。一方、宗族の出資によって学堂が運営され、優秀な子どもは学堂を卒業すると、中心地の学校へ進学し、科挙に合格し、官僚となった者もあった。民国期になると、比較的裕福な家では、男子を小学校へ進学させた。

方塊字で書かれた文として、民間宗教の経典とうたがある。壮族にはうたを掛け合う習俗がある。うたは旋律が固定され、即興的に詞を作るもので、壮語でうたわれた。このうたを備忘録的にあるいは歌本を作成するために、方塊字で記述する。またうたを記した文を恋人に贈ることもあった。方塊字を教えるための教育機関はなかったので、方塊字を学ぶのは自習であった。宗教者を除くと、うたの上手い男性のうちの一部の者のみが方塊字を書くことができた。このような男性は各村に必ず複数名はいた。うたの文を恋人に贈る風習のある地域では、これをもらった女性は村の方塊字の読み書きできる男性に相談しながら、返信のうた文を作った。

中華人民共和国成立以降

初等教育の普及が進むにつれて、男女を問わず、漢字を読み書きできる人が増えた。方塊字を自学する者も少数ながらあったが、2000 年代以降はうたを掛け合う慣習そのものが減ったこともあって、新しく方塊字を自学しようとする者がほぼいなくなった。1956 年から普及の始まったアルファベット表記の現代壮文は、普及の初期より現在に至るまで、日常生活で実用的に用いられたことはない。

なお上記に関連する文書（家譜、歌本、うた文（複写））を広西壮族自治区にて収集した。

（２）農村部における現代壮文の普及活動の実態

現代壮文方案の草案が 1955 年に公表され、その教育機関として 1956 年に桂西壮文学校が開設された。武鳴県では各村から選抜された若者が武鳴県の壮文学校で半年間学び、その課程を修了すると、帰村し村で成人を対象にした壮文普及教育に従事した。

現代壮文学校の生徒は志を持って学習に励んだが(生徒の大半はこの学校でアルファベット文字にはじめて接した、また未就学の女性も生徒に選ばれていた)、帰村した後の「掃文盲(活動)」では困難に直面した。政府の方針は、現代壮文を普及させ、農村から文

盲を無くすというものだった。共同労働の余暇に現代壮文を学ぶべしという指示はあったが、学習するかしないかは各自に委ねられたため、学習への参加率は低かった。漢字を既習した人、方塊字を自学した人には、現代壮文を学ぶモチベーションはなく、それ以外の人にとっては、モチベーションはあっても、座学することもペンを持つことも未経験であったからである。

このようななかで現代壮文の教材に壮のうたを採用したグループだけがそれなりの成果をあげることに成功した。方塊字をまだ学んだことのない若者にとって、うたを記述できるツールを得ることは、魅力的であった。

現代壮文は文法を北部方言に、標準音を武鳴県双橋音とするアルファベット表記の書き言葉である。南北の方言差が著しく、また標準語の確立がなされていない壮語において、現代壮文が実際に使えるものとして存在し得る可能性があるのは武鳴県の他にはなかった。武鳴県でさえ上手くいかなかった「掃文盲（活動）」は、数年の後、成人の識字教育は行き渡ったとして収束し、その後の現代壮文の普及教育は、学校教育に委ねられた。

（3）学校教育における現代壮文の教育実践動の実態

「掃文盲活動」の後、文革期の混乱を経て、現代壮文の普及事業は 1980 年に再開される。

1981 年に学校教育に現代壮文が再び取り入れられ、1982 年に 50 年代の現代壮文方案を修正した「壮文方案（修訂案）」を施行、各県に民族中学、高校が設置され、現代壮文を中等教育でも学習できる仕組みが作られた。広西民族学院中文系に壮文専攻が置かれ、大学において現代壮語の研究・教育が本格化する。

制度上は現代壮文を学ぶ仕組みは整ったが、うまく機能してきたとは言い難い。

中等教育では有名進学校に進学させた生徒数によって各校の格が決まるため、現代壮文の学習は受験勉強に差し障りない範囲で行われていたに過ぎない。

大学では教学体制は確立していたものの、学生は必ずしも現代壮文を学ぶことを志して入学してくるわけではなかった。人気の高い中文系にあって壮語専攻は入試の合格点が低く、かつ優遇されていた。「壮語なんかを大学まで行って学ぶなんて・・・」という世評に抗って学んだとしても、現代壮文を卒業後に使う機会はほぼ無かった。

2000 年代になると、現代壮文を学ぶ仕組み自体が変容する。民族学院では独立した専攻がなくなり、民族中高も一般の中高とほぼ変わらないカリキュラムとなった。

（4）方塊字に関する研究の現況

方塊字の成立は唐代に遡ると言われている。（現在のいわゆる）壮語を話す人々がそれを書き表すために用いてきた文字である。壮族は統一王朝を持ったことがなかったため、方塊字の正書法は確立されなかった。また公用に用いられるものでもなかったために、これを本格的に研究しようとした者は近代以前には現れなかった。

はじめて方塊字を研究対象として取り上げたのは、李方桂『武鳴土語』(1956)であった。現代壮文の普及運動が推進されていた時代には、方塊字の研究はそれほど重きを置かれなかった。そのような中で、少数民族古籍整理組が資料の収集と整理を重ね、1989 年に『古壮字字典』（広西民族出版社）を上梓する。この後も古籍整理組は資料の収集と整理を重ね、伝承されてきたテキスト（宗教経典・歌本）を、方塊字、IPA、現代壮文、漢訳によって記述するスタイルを確立し、『壮族嘹歌』(広西民族出版社)『典蔵壮族師公経』(広西民族出版社)『壮族麽経布洛陀影印注』(広西民族出版社)などの大部のシリーズ本を刊行した。

地域で異なる方塊字ではあるが、研究が進むにつれて、系統性が見いだされていく。David Holm の *Mapping the old Zhuang Character Script* (BRILL 2013)は、壮語の 60 の単語を取り上げ、その意味を表す方塊字の異体字の分布を地図化したものである。

方塊字についての概説書『壮族古籍与文字』（蒙元耀、広西民族出版社　2016 年）も出版され、方塊字を研究する基礎的な環境は整ってきている。

現在、方塊字研究の上で、最大の障壁は方塊字の共通フォントが存在しないことであろう。方塊字は Unicode に収録されていないため、方塊字を PC 上で使用するためには、個々人がプライベートな方塊字フォントを持つ必要がある。

近年広西大学の方块壮字資料庫（http://gdzhdb.l10n-support.com/dsppnl/）が、方塊字のフォントおよび方塊字入力のための IME を公開した。これにより PC や WEB 上で方塊字を扱うことが容易になった。

（5）壮語を母語とする者が現代中国で漢語あるいは壮語で文学表現をすることの意義と問題点

中華人民共和国成立以降に生まれた壮族は、漢語による初等教育を受けている。彼らにとっての書き言葉は漢語である。一方で日常彼らが使う言葉は壮語である。壮族の言語表現者は、この捻れをどのように考えているのかを、漢語で小説を発表している作家と現代壮文で小説を発表している作家にインタビューした。

漢語で書く小説家は、身体に聞こえてくる声は壮語であるのに、それを漢語で表現していくことは、大変難しいことだと述べた。また壮語で書く小説家は、そのような苦労は自

分にはないが、壮語にはない概念を表現しなければならない際には、困難を感じると述べた。

結語

壮族の農村社会では、行政文書や系譜（家譜）を記述する漢字と、壮族のうたを記述する方塊字（漢字系民族文字）を併用してきたが、その使用範囲は明確に区別されてきた。

日本やベトナムの近代以前と同様に、壮族の書き言葉はうたの言葉（方塊字）と政治的言説（漢字）に分立していたといえよう。

日本では漢字漢文と格闘しながら近代的な漢字仮名まじりの言文一致の文体を作り上げ、仮名と漢字の分立状態を終わらせ、またベトナムでは漢字とは別系統のアルファベット表記の文字を使うことによって、漢字漢文文化からの離脱を諮った。

方塊字にせよ現代壮文にせよ壮語の書き言葉は日本やベトナムが経験した内在的な改革過程を経験していない。

自ら希求したわけでもなく、内在的な改革過程も経ていない現代壮文を、壮族の人々は自らの書き言葉として受け入れることができなかったのだといえよう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計１件）

手塚恵子「思想の場としての相互唱－中国壮族の人々のうたの実践より」『アジア民族文化研究』16 号アジア民族文化学会 2017 年:p83－90

〔学会発表〕（計１件）

手塚恵子「思想の場としての相互唱－中国壮族の人々のうたの実践より」（アジア民族文化学会 2017 年度秋季大会 2017 年 11 月 27 日於京都学園大学）

〔図書〕（計１件）

手塚恵子「野のうたびと－中国壮族 蒋宏の生涯－」真下厚・岡部隆志・張正軍・手塚恵子『歌を掛け合う人々』三弥井書店 2017 年:pp67-124

６．研究組織

(1)研究代表者

手塚恵子（TEZUKA Keiko）

京都学園大学・人文学部・教授

研究者番号：60263183